



め・ま・い

牛牛

ヨウカンは一匹の猫である。なめらかな黒い毛におおわれた姿が“和菓子タチバナ屋”のつやつやのヨウカンのようだ。私の飼い猫ではない。通り道で見かける人なつこい猫で、ニャアニャア鳴きながら近寄ってくる。おっとりした雰囲気だけをただよわせている。よそさまの飼い猫に私が勝手にヨウカンという呼び名をつけているのだ。

「ヨウカン、今日は気持ちのいい天気だね。日向ぼっこ日和だな。」

「ニャア！」

ヨウカンは黒毛の長い尻尾をふわふわと揺らしていつも答えてくれる。

最近、私はこのスーパーのあたりを毎日あるきまわっている。このごろはめっきり足が弱ってしまってさっさと歩けない。こわばった足をギクシャクとうごかしてかたつむりのテンポで歩んでいる。それでものろくともなんとか自力で歩けるのはありがたいことだ。

私の姿はきっと、散歩かスーパーへ買出しに行く悠々自適の隠居老人に見えるのだろう。

けれどもその心の中は焦りでいっぱいだ。私はさがしものをして歩きまわっているのに、どうしてもそれが見つからないのだ。見つからなくて非常にまいているのだよ。

そしてそのさがしものというのは……。えーと、とても大事なものなんだが。うーん、それは何なのだろうか……。

どうも思い出せない。うーむ……。何だったか……？

なんだか心臓がドキドキして苦しくなってきたよ……。冷や汗もでてきた。

そして、声がきこえた。

《ねえねえ、修作さん、疲れたんじゃない？顔色が悪いよ。そこのベンチに座って休んだら？》

足元にヨウカンがいる。

「おや……ヨウカン、おまえかい？おまえはしゃべれるのかい？」

《ううん、これはテレパシーよ。修作さんの心に直接わたしの考えを伝えているのよ。》

《ほう、テレパシーかい……。SFみたいだな。それじゃ私の考えも声に出して言わなくてもヨウカンにわかるのかい？》

《ええ、わかるわ。修作さん、水筒のお茶を飲んでいっぷくしたら？少しは疲れがとれると思うわ。》

《そうしょうか。そういえばすごくのどが乾いているな。》

私はスーパーの前の休憩広場におかれたベンチに腰掛けて、水筒に入れてもってきた冷たいほうじ茶をごくごく飲んだ。ヨウカン私のひざの上にぴょんと飛び乗ってまんじゅうのように丸まってそこにおさまった。

ヨウカンをひざにのせて休憩広場に植えられたソテツの葉が風に揺られているのをながめているうちに、胸の苦しさもおさまって頭もすっきりしてきた。涼しい風が心地よい。

《あのね、修作さんは、鍵をさがしているのよ。》

《そうだったかなあ……。そういわれるとそんな気もするよ。》

《カバンや日記帳についているような平べったいちっちゃい金色の鍵よ。》

《そんなものを、私はどうして必死にさがしているんだろうか……。》

ああ、なんだか思い出してきた。その鍵というのは非常に小さなロボットなのだった。極小ロボットが変形して鍵に擬態するのである。鍵は捨てられたりしにくいので、擬態に都合がいいのだ。

鍵ロボは雷鳴におどろいて逃げ出したのだ。警戒心が強くなるように、こわがりに設計されているのである。

……。

さらに思い出したことは、おいらはトンカツだということだ。おいらとヨウカン先輩は惑星ニャポリから宇宙船に乗ってやって来た“ニャポリタン”なのだった。任務中に探査船が故障して地球にのがれてきた遭難者なんだ。

修作さんはおいらたちを助けてくれた。おいらのトンカツという名前も修作さんが“カツ善”のこんがり揚がったトンカツみたいな黄金色の毛だって言ってつけてくれた。

ここへ来たばかりのころ、地球の猫たちを見て、ニャポリタンそっくりの姿なのにおどろいたよ。はじめは、猫たちに惑星ニャポリとおいらたちニャポリタンのことを必死で説明しようとしたんだ。でも猫たちはおいらたちの話をわかってはくれなかった。地球の猫たちは、未だ文明を持つに至っていないようだ。

ニャポリ当局からは人間の文明に干渉しないように指示されていたので、おいらたちは他の人間には猫のふりをした。見た目は猫そのものだし、ニャアニャアいってればいいんだよ。

そしておいらはミーコちゃんに恋した。ミーコちゃんは時計屋で飼われているほっそりしたシャム猫で、青い目がとてもきれいだった。こわがりで臆病なくせに修作さんの家の開いている窓からいきなりぴょんとしてきたんだ。おいらはひとめでミーコちゃんが大好きになった。ミーコちゃんもおいらを好いてくれた。おいらとミーコちゃんは猫のカップルになったんだよ。

ミーコちゃんは、ニャポリの話はわかってくれなかったけど、いっしょに日向ぼっこしたり、散歩に出かけたりして楽しく過ごしたよ。ミーコちゃんは高い木の上や屋根の上が好きなんだ……。

でも、おいらとミーコちゃんは電車にはねられて死んでしまった……。線路のレールと枕木を乗り越えるのに一生懸命になって、電車が近づいているのに気づくのがおくれたんだ……。

ヨウカン先輩は泣きながら、地面に落ちていたトンカツの意識をひろいあつめて保存しようとした。ニャポリタンの意識は適合すれば、他の高等生物の体にのりうつることができるんだ。

はじめヨウカン先輩は自分の体にのりうつらせようとしてくれたんだけど、適合しなかったんだ。

おいらはこのままチャーコちゃんといっしょに死んでしまいたかったけど、ヨウカン先輩はニャポリの故郷で待ってる母ちゃんのところに、おいらの意識をぜったいつれて帰ると言った。

しだいにトンカツの意識はばらばらに散らばって消えそうになった。おいらはもうあきらめたよ。でも同情した修作さんが、自分の体にのりうつたらどうかと言ってくれたんだ。

修作さんにとって幸運なことといってよかったのかどうか、修作さんの体とトンカツの意識は適合した。

今、おいらは修作さんの体におじゃまさせてもらっている。

《トンカツくん、起きたの？》

《あ、はい。修作さんは疲れているみたいですね。》

《トンカツくんと修作さんはもううちに帰って休んだら？わたしは暗くなるまでは鍵口ボをさがしてみる。》

《そうですね。おいらと修作さんはとちゅう鍵口ボをさがしながら、帰ります。家で夕食を用意して待ってますよ。ヨウカン先輩は何か食べたいものありますか？》

《修作さんに料理させるの悪いから、缶詰でいいわ。サケ味のにして。》

《しろかびチーズも残っていますよ。火であぶって焼き目をつけるとうまいですよ。修作さんにはチーズサンドをつくってあげよう。》

《チーズもいいわね。それにしても鍵ロボの臆病なのにもほどがあるわ。ずっと隠れたままでいるなんて。鍵ロボを変形させて通信機にすればすぐにニャポリと連絡をとれるのに。》

おいらと修作さんは、とぼとぼ歩き始めると、通りの反対側に若い警官が立っていてこちらをじっと見ているのに気づいた。制帽と制服と頑丈そうなブーツといろいろな装備品を身にまとって、重そうで暑苦しい。

あの人知ってる。前に声をかけられたんだ。

おいらと修作さんはあいつが苦手だ。なれなれしい態度と恩着せがましい話し方が、まったくもって不愉快なんだよ。

そ知らぬ顔でさっさと立ち去ろうと思っても足がギクシャクとしか動かない。あわててしまい、フラッとよろめいて転びそうになった。

「あぶないよ、おじいさん。大丈夫？」

たっただと駆けてきた警官にすぐ追いつかれてしまった。

「また、帰り道がわからなくなったの？」

いや、私は大丈夫ですよ、お気遣いなく……と言おうとして、口を開いたところで警官は再びたつたつと通りの向こうへ走って行ってしまった。駐車違反だか何だかよくわからないが、もっと手柄になりそうなものを見つけたらしい。ごちゃごちゃ言われずにすんで心底ほっとした。

……。

ふと頭に浮かんだのだが……。

私がさがしているのは豆腐じゃなかったろうか？ そうだおもいだしたぞ。

“加木屋”の“京都風トーフ”だ。濃厚な味わいがミヤ子さんのお気に入りなのである。薬味にはミョーガとネギがあるし、冷奴をおかずに一品加えようと思って買いに出てきたのだった。売り切れていなければいいが。

よ～やく思い出すことができた。

私のような召使ロボットは“めまい”を起こしていろいろな考えが混乱してしまうのだ。

“めまい”が起きるのは、召使ロボットがその強さで主人を圧倒して脅威を与えないように、主人よりひ弱になるように設定されているせいなのだろうか。

私の主人のミヤ子さんは病弱なので、私はそれよりもっと弱くなるように設定されている。

ひ弱な体で家事をこなすのはなかなかつらいのだが、私はミヤ子さんのためにがんばるよ。でも、こうもめまいをおこしてばかりだと、支障があるかも。ひ弱さのレベルをもう少し下げられるように、たのんでみようかね、ケアマネのサイトーさんに。

ミヤ子さんに夕食のときにニャポリタンの話をしてあげよう。ミヤ子さんは何て言うだろうか。

近頃はミュージカルのDVDばかり観ているからね、“キャッツ”の猫ちゃんたちみたいねえ……
というかな。（終）

め・ま・い

<http://p.booklog.jp/book/56073>

著者：牛牛

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/polenta/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56073>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56073>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ